

乳がん検診（施設）

動 向

本邦における乳がんの罹患率は大変高く2位の大腸（結腸・直腸）を引き離し、依然1位となっている。神奈川県乳がん検診受診率は、全国47都道府県中45位と、大変低い受診率にとどまっているなか、弊会では平成18年度より、NPO法人乳房健康研究会と共に、乳がんの早期発見・早期治療を目指し、“ピンクリボンかながわ”事務局として、その活動に積極的に取り組み、乳がん検診受診率向上と、乳がんについての知識の普及・啓発を行なっている。

触診およびマンモグラフィ併用の乳がん検診は全国的に進み、横浜市の検診も参加施設も多くなり、機器のデジタル化もかなり普及してきたが、検診受診者は分散したのか、当施設の受診者は毎年200人ずつ減少している。視触診単独の受診者割合は減少が目立つが、エコー（以下US群）、マンモグラフィ（以下MMG群）併用検診の割合はむしろやや増加傾向にある。経過観察群はむしろ減らしたいのだが、ほとんど変りない。適性な検診の適応や方法の指導啓発が必要で、ただ検診の拡大の時代ではなくて来たように思われる。

結 果

総受診者は293名1.4%減少、視触診群387名、MMG群640名減、US群270名5%減、経過観察群289名9.3%減である。視触診はまだ官庁、企業で若年者や中間期の検診で採用されているが、その有効性は一般常識でも評価されてないにも拘らず採用されているのは残念である。乳がん検診はそれによる死亡者の減少を図るためで、発癌の予防のためではないことが周知されていないようである。厚労省の指針にも拘らずUSの希望者が増えてきたことは喜ばしい。経過観察群を減らすことは検診のレベルを上げなければなかなか困難と思われる。（表1）

要精検率は視触診群では微増、US群では6.2%、MMG群では6.6%、総精検率は6.2%と適正なものとなった。精検受診率は視触診群77.8%、US群88.54%、MMG群65.87%総受診率72.6%でMMG群が65.87%最も低く、US群が88.54%最も高いのは意識と慣れの反映か？（表3、4、5）

発見乳がんは、ほぼ乳がん确实だが確証の回答が得られなかった5例を除くと60例0.29%と例年とほぼ同じである。（表3、4、5、6）視触診群からは今年はなく、US群5例0.1%、MMG群からは43例0.37%と最も多く、経過観察群12例0.43%であった。

経過観察群を除いた要精検群の陽性的中率は4.41%、精検受診者中では6.08%、US群で1.80%でまだ精度の向上が望まれるがMMG群8.64%と悪くないが経過観察群では0.43%で不必要な受診者がまだ多いと思われる。年齢別受診者は40歳台0.18%が最多で50歳60歳30歳台70歳以上30歳以下の順と50歳台を中心の自然の分布となった。発見乳がんは年齢不

明の2名を除く58名では、50歳台26名0.49%、40歳台11名0.18%、70、60歳台0.59%、0.24%、30歳台以下は3名、80歳以上が1名と少なかった。30歳台の1名はUS群であった。

一方発見乳がんを病態側から見ると45%に腫瘤を触知し0.2%に有意な硬結があり、腫瘤無触知が35%であった。従って半数以上に触診の意義があると思われる。51%に何らかの所見があり11.7%は無所見であった。USが施行された55例の18.2%は所見が無かった。

地域あるいは施設によっては、視触診を省略しているものが増加傾向にあるようだが、MMG或いはUSの撮影および読影の高い精度が不可欠と思われる。

MMGの所見では石灰化像が40.0%、腫瘤20.0%、その他の所見28.3%でカテゴリー（以下C）3以上は50例87%である。一方US所見は5例8.3%は無施行または不明例で無所見10例18.2%なので81.8%が有所見であった。MMGとUSの併用はかなり有効だが精度の更なる向上が必須であろう。

発見乳がんの病理は結果不明の2例を除く58例中DCISと浸潤性乳管癌がそれぞれ22例37.9%、浸潤性小葉癌1例0.17%、浸潤性乳管癌4例6.9%、硬癌6例10.35%、その他と不明が2例3.3%であった。腫瘍径か浸潤径のいずれかの情報が得られた53例中5mm以下2例、1.0cm以下11例、2cm以下29例50%、それ以上の多くはDCISの広がり検診乳がんでは大腫瘤は希である。

治療は未施行と不明の8例を除いた48例中BT+AX3例、BT+SLN15例、PG+AX3例、PG+SLN28例で化療3例、乳房再建5例であった。

リンパ節転移（腋窩）はn=0；39例81%、残りの1例は3個以下3例、3個以上は8例17%で有り、浸潤癌62%の割りには予後に期待が持てそうである。サブタイプは結果が得られた38例中LuminalA type30例79%、BtypeとH2、Ki67あわせて8例21%、.tripNは無かった。まだ術前予想はついていないので、術前化学療法は5例8.3%しか行われていない。術後化療のみは無く、術後放射線療法は2例、ホルモン療法が2例で最も多いのは放射+ホルモンが14例90%であった。後療法無しは3例で不明例が多く19例もあったのは結果報告を頂ける限界と考える。

考 察

近年発見乳がん中のDCISの割合が増加しているが、予後の改善に必ずしも結びついていない。返って広範なDCISに対する乳切が増加傾向にあることに米国などより批判的傾向にあるのでDCISの取扱について、検診従事者として困惑するところがある。予後の予測が早くつくように願うものである。

関係の集計表は98頁に掲載